



Column

アフリカのリスクと ソーシャルキャピタル

櫻井 武司

わが家の前を1台の乗用車が土埃を上げながら通りすぎていく。動きが始まったようだ。「必ずもどってくるから、留守をよろしく頼む」と門番のセイドゥーに告げ、2002年9月26日、私たち家族5人は貴重品の手荷物だけを持って3年余り住んだ家を後にした。必ず戻るとするのは気休めではなく、私自身、その可能性は高いと信じていた。以来2年がすぎようとしている。

1999年1月、国際農林水産業研究センターに着任した私は、すぐに西アフリカのコートジボワールにある西アフリカ稲作開発協会(WARDA - The Africa Rice Center)に派遣され、家族とともに同国第二の都市、ブアケに移り住んだ。私はアフリカの農村のリスクと農民行動の関係を研究テーマとしている。WARDAでは低湿地における稲作に焦点をあて、土地所有権・使用権を喪失するリスクが投資に及ぼす影響を解明することにした。

言うまでもなく、アフリカは自然環境の点からも社会環境の点からも非常にリスクの大きい地域である。しかしリスクを管理するための近代的制度(例えば保険)の発達が遅れているため、アフリカの人々は様々な方法を駆使してリスク管理・リスク対処を行っている。したがって、人間行動の本質について研究する経済学者にとって、アフリカ農村は理論を実証する格好の場所なのである。

アフリカの暮らしは非常に疲れる。何をするにも交渉が必要で時間がかかるのだ。これは時間の浪費ではなく、ソーシャルキャピタル(社会関係資本)に投資しているのだと解釈することで合点がいった。「人間関係は大切

である」といってしまえば、日本人である私はその点に関して理解が深いつもりである。しかし、それが他の資本と同様に蓄積したり減耗したりすることの現実味はアフリカで生活するまで実感できなかった。

アフリカにおける投資には、期待した収益をあげないというリスクだけでなく、資産自体を喪失するリスクがある。そのため資産や資金、人的資本も、移動可能な資本は安全な環境を求めて欧米に逃避していく。ではアフリカでは投資が行われないのだろうか? そうではない。ソーシャルキャピタル、すなわち、人間関係の維持・拡大への投資は盛んである。これには、時間を費やすだけでなく金銭の支出を含む。この資本は旱魃や戦争で失うリスクが少ないだけでなく、いざというときの援助に期待できるという保険的機能がある。しかし、それだけでは経済発展は望めない。

2002年9月19日の未明、コートジボワールの主要都市で政府軍の一部が反乱を起こし、私たちの住むブアケは数時間で反乱軍の手に落ちてしまった。その後ブアケを奪還しようとする政府軍と守る反乱軍の間で何度も戦闘が繰り返され、わが家の周辺も戦場となった。水道の供給が止まった自宅に缶詰になった私たちの生存を、水や食料の調達などで救ってくれたのは、それまで築いてきた地元の人たちとの人間関係である。そして1週間後の9月26日、フランスの介入で48時間の停戦が成立し、私たちはブアケを脱出した。

昼と夜の門番たちは、その後もわが家を守り続けてくれた。おかげで、彼らやその他の地元に残った人たちの助けを借りて、ブアケに置いてきた研究資料は半年以上かけてほとんど回収することができたのである。しかし、2003年7月、ブアケに帰任する見込みを失った私は、門番の雇用を打ち切り、自宅に残っていた私財はそのまま放棄することにした。

アフリカに生活して、戦争のリスクという貴重な経験をすることができ、さらに、ソーシャルキャピタルの有効性を実感することができた。経済発展を研究する者として幸いである。現地の状況はいまだ好転していないが、いつか必ず再訪し、皆さんにお礼をいいたい。(本誌本号55頁定例研究会報告要旨も参照)